

【審査論文】

江戸後期から現代における着物の再現およびその着崩れと着装精度の検証

内田彩子、山口直子、伊藤瑞香、鬘谷 要

Reappearance of the kimono in the present age from the second half of Edo and the wearing verification of collapse and fixation accuracy

Ayako UCHIDA, Naoko YAMAGUCHI, Mizuka ITO and Kaname KATSURAYA

要旨

現代の日本人は洋服で生活することが一般的になっており、和服は冠婚葬祭等の儀式的な場面で用いられたりまたは夏のお祭りに用いられるゆかたがほとんどである。そのため、今日ではきものは日本の民族服と言われているにも関わらず、ほとんどの人が和服から離れた生活を送っている。和服を所持していない、所持していても自分で着ることが出来ない、着崩れが生じ易く着崩れた際に自分で直すことが出来ない等の問題が指摘されており、また、少しの着崩れでもだらしがない、みっともないなど見られてしまうことが着物を着るということに対しての障害となっている。

着崩れの要因は多岐にわたると考えられているが、今回は時代の流れと共に着崩れの要因、着崩れの形態が変化しているのかという点に着目した。それにより、日常的に着物を常用していた時代の方が着装しやすかったのか、着装していても着崩れにくかったのかを検証することを目的とした。

まず、現在の着物の形態が完成されたと考えられる江戸時代後半から、ほぼ洋服の着用が主流となる現代までの標準寸法を、裁縫書および教科書から抽出し、身丈、袖丈、前幅、後幅、衽幅、合づま幅等の変遷を追い、身丈、袖丈は時代により変化するが、幅に関する仕立て上がり寸法には大きな変化がないことを示した。

次に、着物が日常的に着用されていた「江戸」、「明治」、「戦前」、洋服が日常着になる「戦後」の4時代の試験衣を製作した。その試験衣を用いて、着装状態を再現し、動作前後の着崩れの比較検証を行った。その結果、着装状態では、戦後はほとんど現在の着装形態と変わらないことが分かった。また、時代をさかのぼるほど衽合わせ位置が下がる傾向が認められた。明治時代は全体的な印象としては現在と大きな変化はないが、衽合わせ位置は明確に下がっていることが分かった。結果として、着崩れは時代による顕著な変化は認められず、どの時代でも同様の着崩れ方、着崩れ量を示した。さらに、長襦袢とひとえ長着を比較すると、長襦袢の方が着崩れ量が大きく、長襦袢が緩衝機構となっていることが示された。

キーワード：着崩れ (deformation of dressing)、おはしより (Ohashori)、標準寸法 (Standard size)

1. 緒言

現在「着物」と表現した場合、広い意味での和服を指すことが一般的である。その着物の形態は、江戸時代に完成した服装がその根底となっており現在の着物の原型といわれる小袖が表着として着用されるよ

うになったのは桃山時代で、それ以後江戸時代初期から中期とさまざまに変化して江戸時代後期には、その形がほぼ確立し、現在に至っているとされている¹⁾。我々が日本の伝統として認識している着物はおおよそ400年前に一定の完成形に至ったと考えられる。

洋装が圧倒的となった現在では、冠婚葬祭、会合等の改まった場面で着物を着用する人がしばしば見られるが、今日では着物は儀式的に用いられたり一部でおしゃれ着として用いられる他は夏のお祭りに用いられるゆかた等が残る程度である。そのため、今日では着物は日本の民族服と言われているにも関わらず、ほとんどの人が和服とは縁の無い生活を送っている。着物を所持していない、所持していても自分で着ることが出来ない、着慣れていないため窮屈に感じる、動作に制限を感じる、着崩れが生じ易く着崩れてしまった際に自分で直すことが出来ない、高価である等多数の問題が存在し、また、少しの着崩れでもだらしがない、みっともないなど見られてしまうことが着物を着るということに対しての障害となっていると考えられる。

また、例えば長着を着装する際に、表1のような決まりごとがあり、このような細かなしきたり的な流儀が着物の普及を妨げる大きな要因となっていると考えられる。ここに示されている項目からも分かるように、美しいとされる着姿にするためには自分で着装する上では極めて確認しづらい要素も多く、着物を気楽に楽しむことを難しくしていると考えられる。

表1 長着着用の際のしきたり²⁾

部 位	注 意 事 項
背中心	背中心の線が真ん中で、真っ直ぐ帯に下りているか。
裾	足首が隠れるくらいの長さを目安にする。
半衿	左右の幅を均等に。
おはしより	幅は人差し指1本分程度が目安。シワをきれいにのばす。
襷	下前の襷先は床から8cm程度、上前の襷先は3～4cm上げるのが基本。
衣紋	こぶし1つ分くらいを基本。

しかしながら、歴史的に見れば日本人が日常着として毎日着用していた当時は、今日のような動きが制限される、窮屈である（着崩れは別である）という感覚を抱いていたのかという疑問が生じる。なぜなら、私たちが日頃着慣れた洋服を着用している際、その様に感じることは少ないからである。

そこで本研究では、着物を日常着としていた当時の人はどのように着装していたか、そして構造や寸法による違いから実際に着崩れの生じ易さに差が生まれるのだろうか、という点に着目した。昭和30年頃に着付け教室の教師をしていた人の話によると、当時は現在ほど着崩れに対して、意識がなかったと述べており、さらに時代をさかのぼれば着崩れに対する意識は、低かったであろうという見解であった。実際、江戸時代や明治時代の和服の写真からフォーマルな場面でも、かなり着崩れていることが確かめられる³⁾。

理想的な着装容姿を実現し、着崩れ等の不具合を最小限に抑えるためには、やはり個々の身体形状（サイズ）により正確に合致した理想的な寸法形状があると考えられ、その形状を幾何学的に求める「割り出し法」の研究が本学和服構成学研究室によって行われている。体格・体型にあった寸法「割り出し法」を用いて、試験衣を製作し実験を行っている。現在までに、ゆかた、ゆかたプラス長襦袢、あわせ長着プラス長襦袢等で実験を行い、割り出し法の有効性を見出している^{4)~7)}。

また、堀田らは、表地と裏地の素材条件を変えて大裁女物裕長着を縫製し、動作前後の写真撮影によってずれ量で着崩れを測っている⁸⁾。また堀田らは、8mmビデオカメラで動作中の動的变化をとらえ、人体

と布のフィット性、空隙量の変化が、初期の着崩れに影響すると述べている⁹⁾。

着崩れの要因は多岐にわたると考えられるが、今回は時代の流れと共に「着崩れの要因」、「着崩れ方」が変化しているのかという点に着目した。それにより、日常的に着物を着ていた時代の方が着崩れやすかったのか、着崩れにくかったのかという点を検証することを目的とした。

研究対象とした時代は、時代の区切りや戦争という歴史的背景を考慮し、着崩れ状態の特徴を捉えるのに効果的であると考えられる江戸時代後半、明治時代、戦前、戦後の4つの時代を取り上げた。

2. 方法

2-1 「大裁女物ひとえ長着」仕立て上がり寸法の変遷

時代ごとの和服の復元や、その当時の着崩れを再現するため、また時代の経過で着崩れ方や量が変化する程度を調べるために試験衣作成の基本データとなる「大裁女物ひとえ長着」の仕立て上がり寸法の変化について詳細に調べた。

本学メディアセンターおよび和服構成研究室に所蔵されている家庭科教科書、裁縫書、専門書の中から、仕立て上がり寸法が記載されているものおよび先行研究¹⁰⁾で用いた試料を含む約40冊を選んだ^{11)~36)}。その中から、ひとえ長着を仕立てる際に必要となる袖丈、袖口、袖幅、袖付、袂丸み、身丈、衿肩明き、くりこし、身八つ口、ゆき、肩幅、後幅、前幅、衿下がり、衿幅、合づま幅、衿下、衿幅の計18箇所の仕立て上がり寸法を抽出した。中でも、袖丈、身丈、前幅、後幅、衿幅、合づま幅の6箇所に着目した。

寸法で表記されているものは、センチメートルに換算した。なお、1尺は鯨尺で約37.88cmとされているので、小数点第二位を四捨五入し、第一位まで求めた。また、グラフ化するために、複数の値で記されているものは平均値を採用することとした。

2-2 試験衣製作（江戸時代から昭和までの着物の再現）

4つの代表的な時代を選び、時代ごとの着物の仕立て上がり形態を知り、着崩れ状態を再現し、着崩れの実験を行うため、その当時の仕立て上がり寸法で着物を再現することを目的とした。

なお、江戸時代は260年余りの長い年月の中で、対丈、引き裾、おはしよりと変化しており、おはしより姿になったのは後期と考えられているため、本研究ではおはしよりを有する形態のものを扱うこととし、江戸時代後期以降のものを取り扱うこととした。また、江戸時代の着物を再現するにあたり、文献からは再現するために必要な寸法を抽出することが出来なかったため、現存している江戸時代後期の着物を実寸し、再現することとした。

2-2-1 試料

長襦袢は紋綸子^{もんりんず}、ひとえ長着は一越縮緬^{ひとこしちりめん}、ともに素材は、絹100%を用い、後の画像処理のために位置情報の格子を描くことから、白無地とした。一越縮緬は、平縮緬の一種で、横糸に織り込む強撚糸の左撚り、右撚りを一本ずつ交互に織った縮緬で、しぼが細かいことが特徴である³⁷⁾。図1、2は着崩れした時に長襦袢（紋綸子）とひとえ長着（一越縮緬）が互いに接する面を顕微鏡で観察したものである。

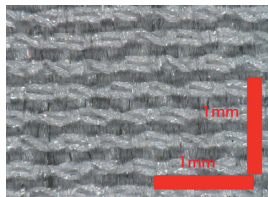


図1 一越縮緬（裏）

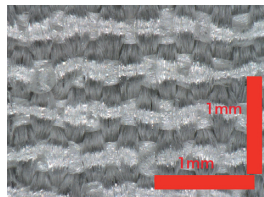


図2 紋綾子（表）

2-2-2 布の摩擦特性

実際に着用した時と同じ状態になるように、ひとえ長着の裏面と長襦袢の表面の摩擦を調べた。

図3に示すように厚さ0.5cmの発泡板にひとえ長着で使用する布を裏面が表側に出るように貼り付け、耳（たて糸）に対して平行方向、垂直方向、さらに45°方向に目印となる線を付した（以下Aとする）。同じ発泡板で10cm×10cmのものを用意し、長襦袢地の表が出るように貼り付けた（以下Bとする）。図4に示すようにAの上にBを乗せ、2枚の布の表面を密着させ、その上に400gの文鎮を乗せればねばかりで引っ張った。引っ張る方向は、(A)に引いた線を目安に②→①、①→②、③→④、④→③、⑧→⑦、⑥→⑤、⑤→⑥、⑦→⑧という順番で、実験を行った。実験は同じ方向で、特異的な特異値を避けるため、1cm程度位置をずらして3回行いその平均を求めた。

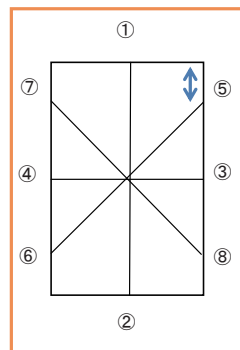


図3 摩擦特性実験

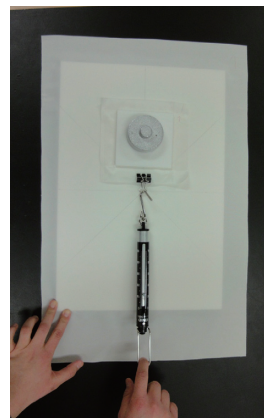


図4 摩擦測定手法

2-2-3 製作

ひとえ長着は、「平面構成学実習Ⅰ」³⁶⁾の大裁女物ひとえ長着を参考に、長襦袢は「平面構成学実習Ⅱ」³⁸⁾の大裁ち女物ひとえ長襦袢・無双袖 裾引返し 別衿仕立てを参考に仕立てた。長襦袢には、三河木綿（厚地の白木綿織物）を芯とし、絹地の半衿をかけた。今回の試験衣を着用して実験に臨んだ被験者3名の身体計測値を表2に示す。被験者は当時の女性の体型を考慮し、現在の標準とされている9号よりも細身の体型の人とした。

以下の方法で求めた寸法に基づき試験衣を仕立てた。仕立て上がり寸法の身丈はその時代の平均身長を基準にしていると考えられるために、当時の平均身長に補正係数を乗じたものを用いた。仕立て上がり寸法の身丈はその時代の平均身長を基準にしていると考えられる。4つの時代の平均身長と今回の被験者の身長（158cm）との整合性を考えて補正係数を用いた。補正係数は以下の通りである（表3）。完成後、長襦袢には赤で、ひとえ長着には青で格子を記した（図5、図6）。

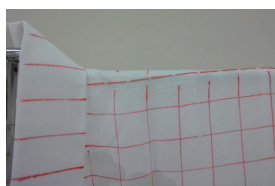


図5 長襦袢

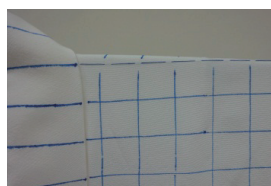


図6 ひとえ長着

表2 被験者の体型

被験者	A	B	C
身長	158	156	160
バスト	80	80	80
ウエスト	63	68	62
ヒップ	88	87	87

表3 補正係数

年代	平均身長	補正係数 現在の平均身長 各時代の平均身長	仕立上がり身丈	
			当時	今回
現在	158.0	1.0000		
江戸型	144.5	1.0934	147.5	161.3
明治型	149.1	1.0597	148.0	156.8
昭和初期型	151.2	1.0450	148.0	154.7
戦後型	156.0	1.0128	154.0	156.0

2-3 着装実験

2-3-1 着装条件

資料³⁾³⁹⁾をもとに時代ごとの着装容姿の再現を行い、着崩れの測定を行った。

着装実験は全ての時代に対し、最低3回繰り返し測定を行い、3回の平均値を用いた。さらに、長襦袢、ひとえ長着それぞれの着崩れ量を計測するために、被験者に長襦袢を着せ付けた上に、ずれを生じないようにひとえ長着を着せ付け、所定の動作を行わせた。計測は、長襦袢・ひとえ長着それぞれについて行った。着装条件は、被験者3名とも以下の同条件とした。肌着は肌の上に直接長襦袢を着用すると汗や肌の状態により、条件が異なることを避けるため3名とも共通の「ゆかた下スリッパ」（上身頃 綿100%、下身頃 ポリエステル100%）を着用した。帯は、市販のウールの半幅帯を用い文庫結びとした。着装者1名、補助者2名によって測定箇所寸法の計測しながら、以下の項目に従って着装を行った。被験者の頸窩点にはマーカースとしてシールを貼り人体上の目印とした。同じ被験者が着装を行う際、複数回の実験で一定の締結緊力を再現するため、腰紐、伊達締め、帯には縫い印を付けた。同様に着せ付け時のおはしより量や形状を揃える目安とするため、前身頃・後身頃のおはしより下、おはしより下山、帯位置の上下に縫い印を付した。

今回、着装容姿は「美しいキモノ」³⁹⁾、「幕末の素顔 日本異外史」³⁾等を参考にした。

まず、ゆかた下スリッパの上に、長襦袢を着装する。その際、各時代とも以下の4条件に従った。

- 1) 上半身の背縫いは背中心に一致させる。
- 2) 肩山の位置を肩線より2cm後方とする。
- 3) 頸窩点を通るように、衿の交差位置を決める。
- 4) 身頃で生じた余剰分は両脇によせ、帯で固定した。

なお衣紋の抜き加減は、2)の肩山の位置を決めた段階で自然に決まったところとした。

次に、長襦袢の上にひとえ長着を着装させた。以下9項目は、ひとえ長着着装時の条件である。

- 1) 上半身の背縫いは背中心に合わせる。
- 2) 肩山の位置を肩線より2cm後方とする。
- 3) 上前褸先の位置は、床から6cmとし、上前位置を定める際は左前身頃の衿下を右腰骨上とする。
- 4) 下前裾位置は、折り返し部分で床から8.2cmとする。
- 5) 裾位置はくるぶしが隠れる程度とし、床から背で3cm、両脇で3.5cmとした。
- 6) 腰紐の位置は腰骨上方2cmとした。
- 7) 衿合わせ位置は頸窩点直下とし、頸窩点からの長さとした。
- 8) 身頃で生じた余剰分は両脇によせ、帯で固定した。

9) おはしよりの整え方は、どの時代も自然に決まる長さとし、統一した。

今回、着装実験を行う上で、最も形態が異なるのは、ひとえ長着の衿合わせ位置である。着装容姿の写真を元に、戦後型においては、長襦袢が1cm程度見える様に、衿合わせを決めたが、昭和初期型においては、長襦袢が2cm程度見えるように決めた。明治型では、衿合わせ位置が大きく下がるため、頸窩点から10cm下とした。江戸型では、さらに衿合わせ位置が下がり、頸窩点から15cm下とした。被験者3名とも同条件で着装し、初期の設定を行ったが、同じ胸囲でも胸部の厚みや幅、肩の傾斜等が異なるため、初期の着装状態を維持できる無理のない範囲とした。特に衿合わせは頸窩点から鉛直に下るよう注意して初期の設定を行った。

2-3-2 負荷動作

先行研究を元に、ぶら下がりとツイストを採用し、この2つを続けて行うこととした¹⁴⁾。

- 1) ぶら下がり 右手、左手の順にバーを掴みぶら下がり健康器具に5秒間ぶら下がる。完全に伸びた状態で足先が床に接しないものとした。
- 2) ツイスト 壁に手の位置をマークし、同じ立ち位置にするため床に棲先位置の目印を付けた。壁に背を向けた状態で立ち、右回転から始め2往復させた。

2-3-3 デジタルカメラによる撮影

撮影は、先行研究に倣い⁴⁰⁾、着装直後と前述した所定の付加動作直後とした。撮影姿勢は、直立した状態で、正面、左側面、背面、右側面の順に撮影した。

2-3-4 画像処理

動作前後の写真に、以下に示す手順でパソコン上でPhotoshop®による画像処理を行い、重ね合わせることで、着崩れ方向と着崩れ量を定量的に求めた。

- 1) 動作前の画像を、試験衣の色相を長襦袢は青に、ひとえ長着は赤に変更し、透明度を50%とした。
- 2) 正面では被験者の頸窩点マーカーと足先点を基準にして、動作後の画像に正しく重ね合わせた。必要に応じて、動作前の画像の角度とサイズを調整した。
- 3) 正面と背面に同様の処理を行った。

2-3-5 計測箇所

より正確な着崩れを計測するために、直接計測可能な部分については定規、分度器を用いて計測した。その結果を表4に示す。なお、長襦袢の計測はひとえ長着の撮影、計測終了後に、長襦袢を動かさないようにひとえ長着を脱衣させ、計測した。ただし長襦袢では、おはしよりがないため、7)～11)については計測していない。

重ね合わせた画像から着崩れ方向と量を読み取り、着崩れ量ごとに色分けした矢印を画像上に配した。ただし、衿元と裾は布のゆれの影響を受けやすいと判断し、実測値を優先した。

表4 計測箇所

	計測箇所	基準点・計測位置
裾関連	1) 下前折り返し位置	床基準
	2) 上前褸先位置	床基準
	3) 右脇裾位置	床基準
	4) 背中心裾位置	床基準
	5) 左脇裾位置	床基準
	6) 腰紐位置	衿先位置から腰紐位置まで
おはしより	7) 前おはしより量	衿付け線位置で帯下からおはしより山まで
	8) 後おはしより量	背中心で帯下からおはしより山まで
	9) 左脇おはしより量	左脇で帯下からおはしより山まで
	10) 背中心	上半身の背中心のおはしより山を基準とした時の下半身の背中心のずれ
	11) 衿付け線	下半身の衿付け線を基準とした時の上半身のおはしより山の衿付け線のずれ
衿元	12) 頸窩点	頸窩点から衿交差位置まで
	13) 衿合わせ角度	衿交差位置での角度

3. 結果と考察

3-1 「大裁女物ひとえ長着」仕立て上がり寸法の変遷

各寸法の変遷を図7に示した。

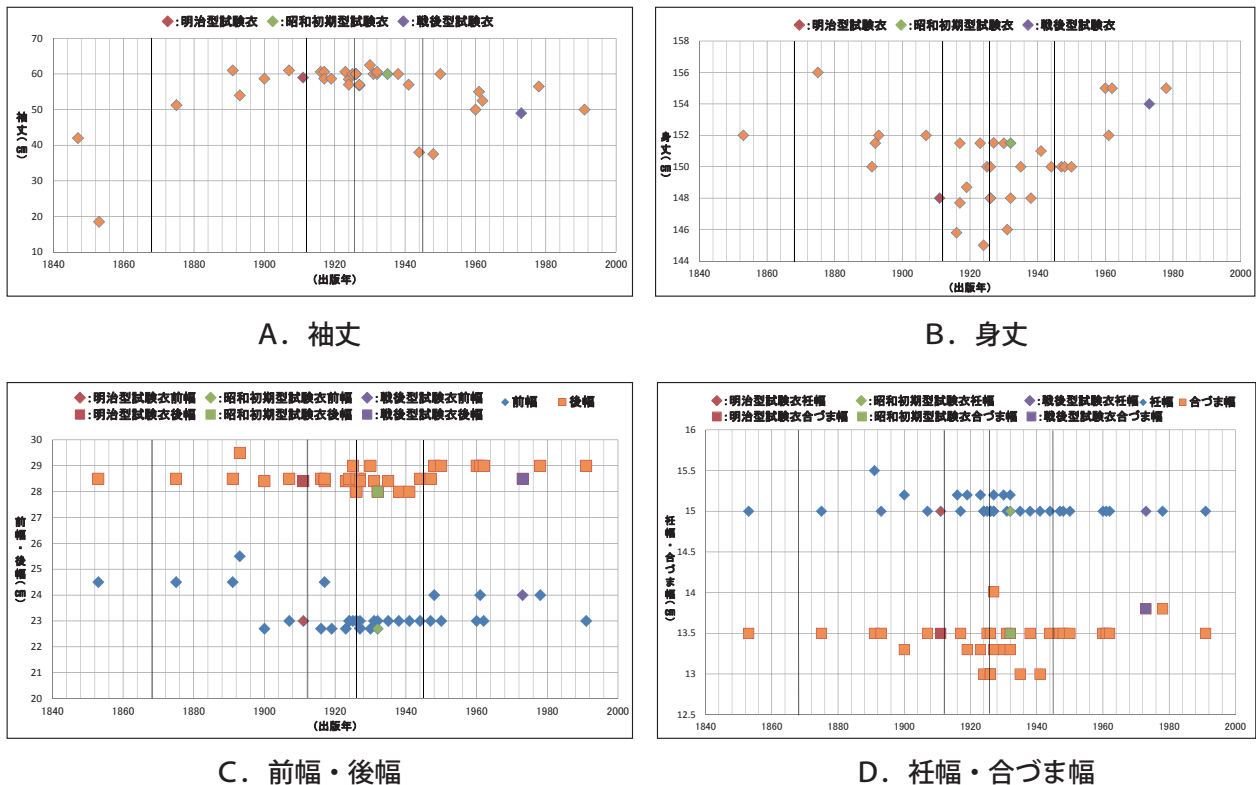


図7 大裁女物ひとえ長着の制作年代と各部位の仕立て上がり寸法の変遷

袖丈の最大値と最小値の差は、42.5cmであり、また1944～1948年の戦中・戦後は袖丈が短くなっていることが分かる。これは、物資が不足していたため、短くせざるを得なかったことが要因と推察された。身丈の最大値と最小値の差は11cmで、その当時の着用者の身長や布幅および着装状態や対丈、引き裾か

おはしよりか等の流行が影響していることが考えられた。

前幅の最大値は、25.5cmであった。最小値は、22.7cmであった。後幅の最大値は、昭和、特に戦後で多く見られる29cmであった。最小値は28cmであり、その差は前幅が2.8cm、後幅では1cmであった。衽幅は、ほとんどの文献でほぼ15cmであった。合づま幅の最大値は、13.8cmで最小値は、13.0cmであった。その差は衽幅が0.5cm、合づま幅が0.8cmであり、ほとんど変化がないことが示された。

以上のように、前幅、後幅、衽幅、合づま幅の幅に関する仕立て上がり寸法には大きな変化がないことが分かった。

しかし、平均身長が1900年（147cm）から現在までに10cm以上伸びているように日本人の体型が変化しているのにも関わらず、標準寸法が変化していない点は疑問が残り、さらに考察が必要である。その理由のひとつとして高月は和服の形態そのものが、単純で、平面的なものであり、丈、幅ともに多くのゆりみが入られているため、多少の寸法の加減は、着装により融通がつくところから、今なお、多くの人たちが標準寸法に依存する所以があるものと考えられると述べている⁴¹⁾。さらに、どんな体型の人でも和服を仕立てる時に用いる布、すなわち一反（幅36cm前後、長さ約12m前後）と決まった分量の布を使用して仕立て上げ、布の量は時代が変わっても一定であるため、体型によって寸法を加減する場合でも最大で、前幅、後幅にそれぞれ1～3cm程度加える程度である。なお、衽幅と合づま幅は、衽幅15cm、合づま幅13.5cmと一定の数値が用いられることがほとんどである。

3-2 試験衣製作（江戸時代から昭和までの着物の再現）

3-2-1 布の摩擦特性

2-2-2項で述べた方法によって行った各試料の摩擦特性について、3回の測定の実験結果を図8に示す。

なお、図8の数値は小さいほど表面摩擦が小さいことを示す。図8の結果より、本実験で用いた試料すなわち一越縮緬については、たて方向は表面摩擦が小さく、よこ方向は大きいことが明らかとなった。図1に示した一越縮緬の形態学的観察から、縦糸に凹凸が認められたため、その突起している織りにより大きな摩擦を生じたと考えられる。

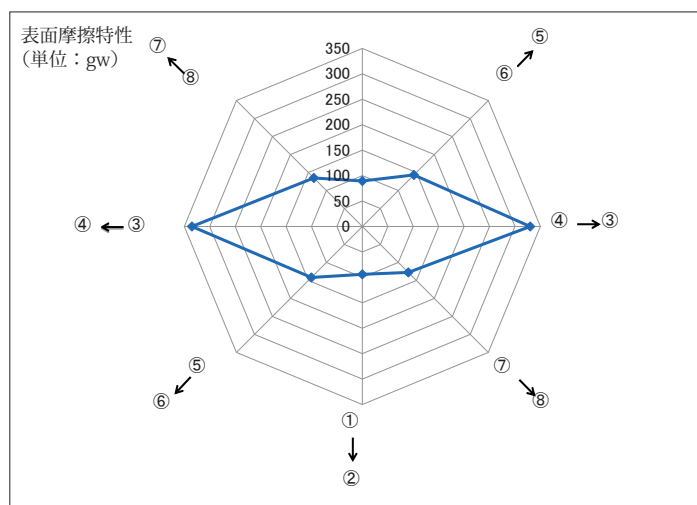


図8 表面摩擦 実験結果

3-2-2 試験衣 製作

2-2-3項で述べた方法によって試験衣を表5の通り仕上げた。なお、試験衣は3人の被験者に同様のものを用いる。

表5 試験衣の仕立て上がり寸法

参考資料名	江戸型		明治型		昭和初期型		戦後型	
	宇治風景模様小袖		新編 裁縫教科書		家庭科教科書 4 尋常小学 裁縫新教授書		被服 I	
年代	江戸時代後半		1911年		1932年		1973年	
	ひとえ	長襦袢	ひとえ	長襦袢	ひとえ	長襦袢	ひとえ	長襦袢
袖丈	57.8	56.8	59	58	60	59	49	48
袖口	20.8		23~24.5		23		22	
袖付	24	23	24.5	23.5	25	24	23	
袖幅	31	30	32.5	31.5	32	31	33	32
袖丸み	2		2		2		2	
身丈	161.3	127.2	156.8	127.2	154.7	127.2	156.0	127.2
衿肩開き	裁切り 10	裁切り 9.5	裁切り 9.5	裁切り 9	裁切り 10	裁切り 9.5	裁切り 9.75	裁切り 9.25
くりこし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	2.5	2.5
身八つ口	13.4	14.4	11.5	12.5	13	14	14	15
ゆき	61.5	60.2	62.5	61.5	62	61	64	63
肩幅	30.2	30.2	30	30	30	30	31	31
後幅	29.4	30.2	28.5	30	28	30	29	29
前幅	23	26	23	26	23	26	24	27
衿下がり	23.8		23		23		22	
衿幅	14.6		15		15		15	
合づま幅	13		13.5		13.5		13.75	
衿下	80.3	78	80.5	78	78.4	78	78	78
衿幅	11.4	5.5	5.5	5	5.5	5	5.5	5

備考 長襦袢の後幅は、肩幅との関係によりひとえ長着より長くならないよう調節した。

3-3 着装実験

図9～図11は、2-3項で述べた方法によって着装実験を行った結果について、被験者別にひとえ長着の実測値を江戸型、明治型、昭和初期型、戦後型と比較するため着崩れ量について3回の試行の平均値を図示したものである。

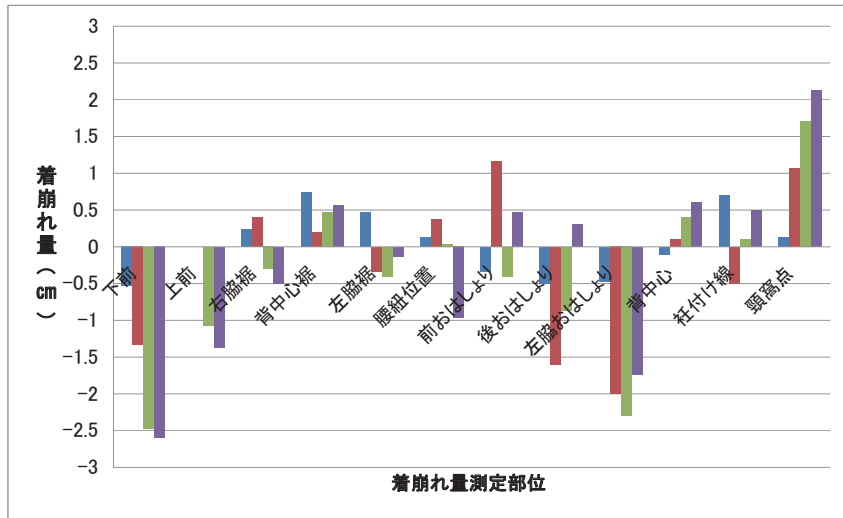
青で示した江戸型では着崩れ量は少なく、緑で示した昭和初期型、紫で示した戦後型では着崩れ量が多い傾向が見られた。被験者Aが終了した段階で、戦後型と比較すると江戸型、明治型は着崩れ量が少なく、古い時代の方が着崩れしにくいことが予想された。

被験者Bの着崩れ量は、特に時代による変化は確認できなかった。最後に、被験者Cの着崩れ量では、戦後型の着崩れが目立つところもあるが、江戸型の着崩れが大きい計測箇所もあった。

被験者Aの結果から、戦後型と比較すると江戸型、明治型では着崩れ量が少なく、古い時代の方が着崩れしにくいことが予想されたが、被験者B、Cの結果からは、着崩れ易さと時代には相関は認められず、古い時代の方が着崩れ難いという判断はできないことが分かった。

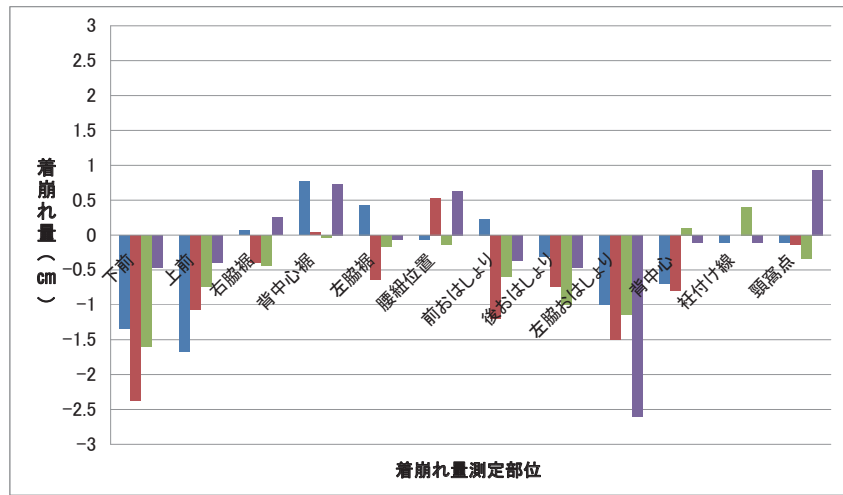
次に被験者3名の、江戸型の頸窩点から衿合わせ位置までの長さの着崩れ量の3回の平均値を示す（図12）。頸窩点から衿交差位置までの長さは下がる傾向にあり、グラフの青で示した長襦袢は、被験者3名とも0.7～2.4cm崩れているのに対し、赤で示したひとえ長着は0.1cm～0.3cmしか崩れていなかった。江戸型はひとえ長着の衿合わせ位置を15cm下げることによって脇の辺りに身頃の余剰分の布が溜まり、ゆとりが生じることが考えられ、所定の動作を行ってもこのゆとりが緩衝能を示し、ほとんど動かなかったものと考えられた。

長襦袢とひとえ長着の着崩れ量を比較すると長襦袢の方が大きく崩れる傾向が見られた。図13は被験者Cの昭和初期型の動作前後を重ね合わせたもので、着崩れ量や方向を色別に矢印で示した。このことから長襦袢は、長着に比較して大きく崩れていることが確認できる。長襦袢は着崩れの緩衝機構となっていることが考えられ、いずれの場合でも長襦袢が犠牲になり、ひとえ長着の着崩れを防いでいるということが示唆された。



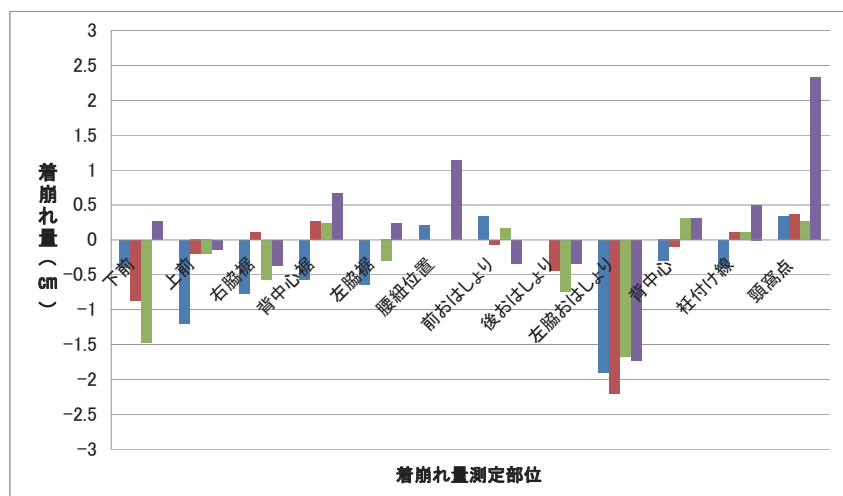
■：江戸型 ■：明治型 ■：昭和初期型 ■：戦後型

図9 時代別試作長着の着崩れ量 (被験者A)



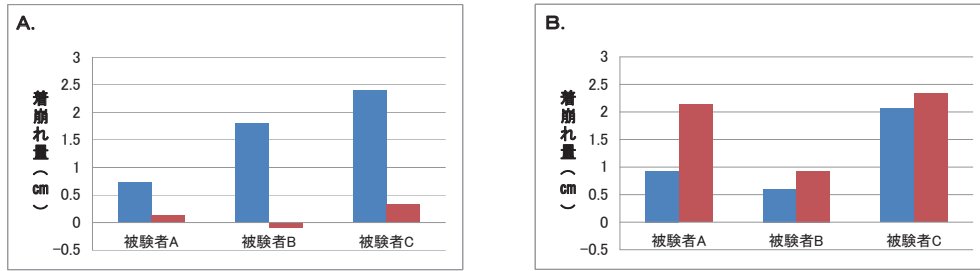
■：江戸型 ■：明治型 ■：昭和初期型 ■：戦後型

図10 時代別試作長着の着崩れ量 (被験者B)



■：江戸型 ■：明治型 ■：昭和初期型 ■：戦後型

図11 時代別試作長着の着崩れ量 (被験者C)



A：江戸型、B：戦後型、青：長襦袢、赤：ひとえ長着

図12 江戸型および戦後型の頸窩点における着崩れ量の比較



A：長襦袢

B：ひとえ長着

図13 長襦袢とひとえ長着の着崩れ量の比較

4. 総括

本研究は、日常和服とは離れた生活を送っている特に若い女性に、より身近に和服を感じ、着装回数を少しでも増やしてほしいという思いから、出来るだけ着崩れを生じない着装方法を確立することを最終目的として行った。今日では、盛装用となっている着物が日常着として着用されていた時代では、現代に比べて着崩れが起こりにくかったかを検証した。

着崩れを時代によって比較した場合、実験前の予想では、より古い時代の着物が着装様式の違いも寄与することで、着崩れしにくいのではないかと予想していたが、結果は異なるものであった。試みた中では着崩れ易さと時代には相関は認められず、古い時代の方が着崩れ難いということはいえない、という結論であった。

時代を遡るほど、頸窩点から衿交差位置までの距離が下がっていて脇の辺りに身頃の余剰分の布が溜まり、結果としてゆとりが生じ、そのため、動作を行っても大きな着崩れを起こすことがなかったものと考えられる。一方、戦後型においては長襦袢が1cm見える程度に初期着装状態を設定しているため、前身頃で胸を覆うように着せ付けることになり脇の辺りに布の余剰分が生じないため、上半身にゆとりがなくなり、少しの動きでも布が引っ張られることで衿元が下がることで着崩れが生じる結果になった。

各時代を再現して着装実験を行ったが、衿合わせの崩れ方を除き、着崩れ量・着崩れ方に明確な差異は認められなかった。また、長襦袢とひとえ長着のそれぞれの着崩れ量の比較から、長襦袢がひとえ長着の着崩れを緩衝し、さらに、おはしよりも着崩れの緩衝機構となることが確認された。

以上の結果より、次のような結論を導くことが出来る。

第一に、仕立て上がり寸法の変化は袖丈および身丈の丈に関しては、時代情勢や流行により変化するが、幅に関しては大きな変化は見られなかった。第二に、時代による着装の形態に変化が認められるものの着崩れ量においては、大きな差異は認められなかった。第三に、長襦袢はひとえ長着の緩衝機構となる。そして第四に、おはしよりは着崩れの緩衝機構となっていることが再確認された。

文献

- 1) 河村まち子、北島恭代、「江戸時代着物の裁ち方に関する一考察」、共立女子大学家政学部紀要 第38号、pp.25-33 (1992).
- 2) ハースト婦人画報社、「いろはにキモノ」、p.130 (2012).
- 3) 永 六輔、「幕末の素顔 日本異外史」、毎日新聞社 (1970).
- 4) 仲村洋子、羽生京子、「和服における着崩れについての考察」、和洋女子大学紀要 第43集(家政系編)、pp.37-51 (2003).
- 5) 羽生京子、仲村洋子、「和服における着崩れについての考察(第2報)」、和洋女子大学紀要 第44集(家政系編)、pp.11-26 (2004).
- 6) 仲村洋子、羽生京子、「和服における着崩れについての考察(第3報)」、和洋女子大学紀要 第46集(家政系編)、pp.13-27 (2006).
- 7) 仲村洋子、羽生京子、「和服における着崩れについての考察(第4報)」、和洋女子大学紀要 第48集(家政系編)、pp.9-20 (2008).
- 8) 堀田延子、林 智子、広瀬明美、池永彰作、「複合布としての和服地 -2, 3の消費性能について-」、平安女学院短期大学紀要 18、pp.54-63 (1987).
- 9) 堀田延子、林 智子、広瀬明美、池永彰作、「複合布としての和服地 -体型と着装くずれについて-」、平安女学院短期大学紀要19、pp.92-103 (1988).
- 10) 羽生京子、「和服構成における体型と縫製との関係(第一報) -標準寸法について-」、和洋女子大学家政学部紀要 第24号 (1983).
- 11) 岡野英太郎、「日本裁縫獨案内」、東雲堂 (1892).
- 12) 谷田部順子、「裁縫教科書 上巻」、明治図書出版 (1900).
- 13) 長尾 糸、「裁縫教科書 上巻」、修文館 (1916).
- 14) 飯沼しづ子、「図解 裁縫獨まなび」、大完社書店 (1917).
- 15) 共立女子職業学校、「裁縫新教科書 上巻」、大日本圖書 (1919).
- 16) 菅 しげ、門田たき、「新式 裁縫手芸全書 全」、東京裁縫研究会出版部 (1923).
- 17) 田村てう、「メートル法使用 新裁縫書」、宝文館 (1924).
- 18) 吉村千鶴、「現代 裁縫教科書」、東京開成館 (1925).
- 19) 成田 順、「中等教育 裁縫教科書 I」、大成書院 (1926).
- 20) 共立女子職業学校、「増訂 裁縫新教科書 メートル法適用 上巻」、大日本圖書 (1926).
- 21) 栗原秀子、大和花子、「和洋 裁縫獨まなび 全」、精華堂 (1927).
- 22) 高橋貴四郎、「メートルと鯨尺對照 新編裁縫之秘書 終」、福岡県女子技芸教育社 (1927).
- 23) 渡部みの子、「新しい 裁縫の仕方」、伊林書店 (1927).
- 24) 佐々木享、「和洋裁縫 手芸全集」、婦女界社 (1930).
- 25) 戸板裁縫学校 裁縫研究会、「中等裁縫教科書 一卷」、富山房 (1931).
- 26) 「家庭科教科書4 尋常小学 裁縫新教授書」、大空社 (1932).
- 27) 大妻コタカ、「和服裁縫繰回し 名案集」、同文館 (1932).
- 28) 松村 豊、今村品子、「新々 裁縫教科書 改訂版 1」、盛林堂 (1935).
- 29) 「裁縫大要 全」、明治の家庭社 (1941).
- 30) 成田 順、安東テイ、藤田とら、「裁縫 1」、実業教科書 (1948).
- 31) 山本らく、「和裁提要」、(1950).
- 32) 山本らく、「新訂 和裁提要」、刀江書院 (1960).
- 33) 岩松マス、「図解式 和服裁縫全集 後編」、雄鶏社 (1961).
- 34) 成田 順 ほか11名、「被服 I」、教育図書 (1973).
- 35) 土井幸代、「和裁」、同文書院 (1978).
- 36) 永野順子、「平面構成学実習 I」、衣生活研究会 (1991).
- 37) 文化出版局、「最新きもの用語辞典」、p.290 (1997).
- 38) 永野順子、「平面構成学実習 II」、衣生活研究会、pp.90-135 (1989).
- 39) ハースト婦人画報社、「美しいキモノ」(1973).
- 40) 山口直子、「平成22年度 和洋女子大学大学院修士論文 -和服の着崩れにおける素材の影響とそのメカニズムについて-」(2011).
- 41) 高月智志子、「和服寸法設定の推移について(第3報)」、東京家政大学研究紀要 第14号、pp.17-28 (1974).

内田彩子 (和洋女子大学生生活科学系助手)

山口直子 (和洋女子大学生生活科学系助手)

伊藤瑞香 (和洋女子大学生生活科学系助教)

鬘谷 要 (和洋女子大学生生活科学系教授)

(2013年11月29日受付)